

# 基本的な考え方

## 1

### 景観をつくるもの

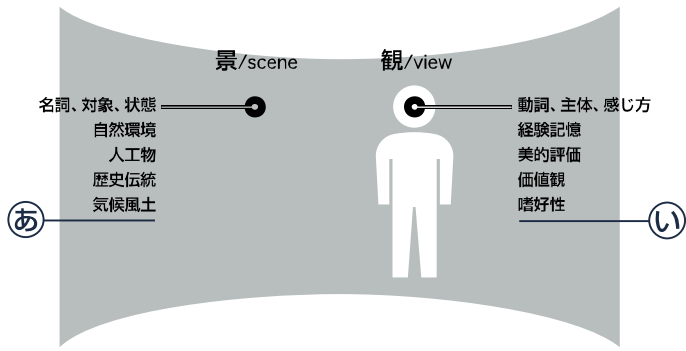


図1：景観の成立・構成要素

「景観」を考えるにあたって、まず言葉の上から探ってみましょう。この漢字二文字の「景」をscene、「観」をviewと英語に置き換えるとわかりやすくなります。

「景」は観る「対象や状態」を表しており、気候や植生などの自然環境や人工の建物、道路など周りにあるものすべて、さらにはそこで営まれる様々な活動などが含まれます。一方「観」は観る人自体の「感じ方」を示しており、そこに住む市民や街を訪れる人たち全てが体験している、観ること感じることそのものといえます。

このように「景観」とは、「どのような対象物」を「どのように観るか」という二つの概念が対になって成立しているものと考えられます。それは、決して特別なことではなく、そこに住む人にとって極めて自然な毎日の暮らしそのものであり、また訪れる人にとっては、その街の歴史や文化などを理解し判断するための大きな要素となっています。

札幌の景観はどうあるべきか、あまり大袈裟に考えてしまうと議論だけで現実的に進まなくなってしまいます。できることから、コストをあまりかけずに景観をほんの少し意識しましょう。中でも第一印象の大きな部分を占める「色」に対してこれまで以上に気を配ることで、誰もが美しく感じられる都市景観が形成され、より豊かな都市環境がつけられます。

## 2

### 環境デザインと配色——②の成立

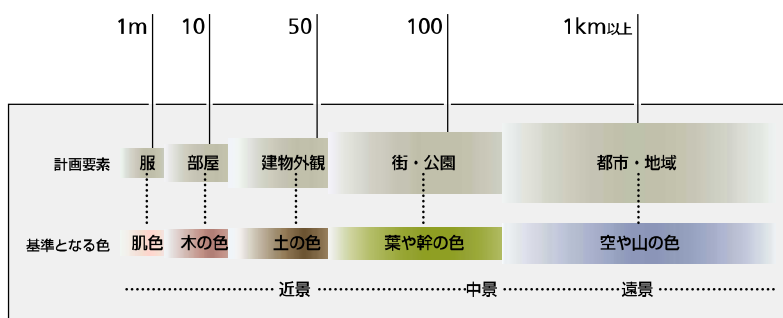


図2：色彩計画における配色基準

#### a. 色彩計画における配色基準

配色を考える時の基準は、人を中心に組み合わせられるものとの距離によって変わります。

私たちは、同時にいくつかの色を眺めて全体の配色バランスを考えることを習慣的に行っています。

図2のように、最初は身に着ける(身体)範囲の1mは肌の色が基準となり、次に数歩歩く10mの範囲、これは建物の内部空間であり、素材としては木(木目)の色が基準として重要です。50mになるとインテリアからエクステリアへ広がり、建物などの外観が周辺の土や石などの自然素材色と、どのように対比して見えるかが基準となります。さらに100m以上離れると植物の葉の緑、幹の色、そして空の色や背景の山の色など、中景から遠景の変化が全体の配色イメージとして馴染んで見えるかどうか重要な判断基準となります。

遠景から中景、近景にいたる見え方は、目線の角度を変えるだけで同時に眺めることができます。普段はそれほど意識しなくても、桜の花が咲く季節や紅葉の季節や初雪の降った朝などは、誰もが景観全体を色として意識できます。色のバランスがとれていることは、環境や生活そのものをしっかりとセンスアップさせてくれます。

#### b. 景観の色彩計画の視点 景観に対して建物単体をどのように考えるか——向こう三軒両隣の考え方

俗に言う「向こう三軒両隣」は、景観における意識の持ち方についての重要なキーワードになります。初めに、計画する建物の両隣を意識し、少し離れた地点から同時に眺めて全体の調和がとれるように考えます。次に、通りから向かい側の建物も同時に眺めて考えます。札幌の街並みの特徴である直交する幅広い道路(格子状街路)は、見通しがよく建物の連続性を強調しますから、両隣を越えてより広い街区をつながりを考慮する必要があります。

建物などの人工物は、目立たせるのではなく季節毎に変化する花や樹木など自然の美しさを強調させるような効果を考えるべきでしょう。

具体的な考え方としては、次の3種類の配色をイメージすると良いでしょう。

周囲の環境を「地」、計画する建物を「図」として考えます。「地」となるものは、遠景の山や周囲の木々などの自然物もあれば、すぐ後方のより大きい建物である場合や両隣の建物の場合もあります。図3のように「地」と「図」が同じ印象になる【消去型】、類似色で多少違いはあっても調和して見える【融和型】、「図」が際だって見える【強調型】の3種類がありますが、季節がダイナミックに変化する札幌の自然に調和させるためには、【消去型】【融和型】になるように計画することが大切です。

#### ヒント

色相 [Hue] : その色が色環の中で赤～黄～青のどの位置にあるかを示す。  
 明度 [Value] : 色の明るさを示す。明度が最も高いのが白。最も暗いのが黒。  
 彩度 [Chroma] : 色のあざやかさを示す。彩度が高ければあざやかである。

## 3

### カラーボキャブラリーの成立——③の成立

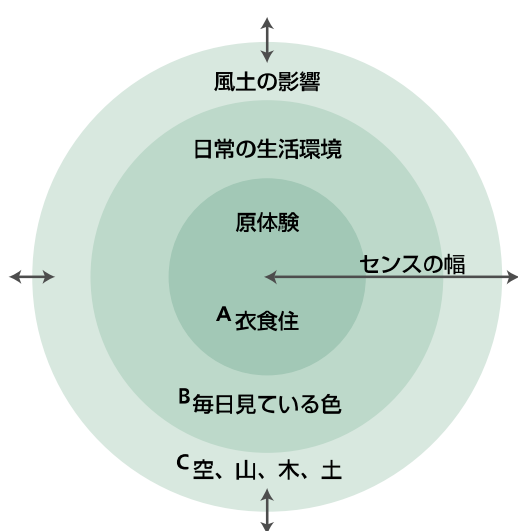


図4：嗜好傾向の成立過程

一方において、景観に対して主体である人の「感じ方」がどのようにして形成されるかを考えます。個人的な配色の好き嫌いは、かなり早い時期に決まるようです。

- 親からの影響、初期段階のセンス、無意識での条件：図中A
- 毎日の生活環境、暮らしのセンス、現状での条件：図中B
- 風土地域環境、天気・気候、大きな環境条件：図中C

個々人は、この3つの条件に影響され成長とともに、徐々に自分の頭の中に配色が蓄積されていきます。

この配色の蓄積は、そのままその本人の「カラーボキャブラリー(配色のパターン化=配色語彙)」となり、配色を判断する際の評価基準となります。新しい配色は「好きか嫌いか」、「良いか悪いか」、「勤めるか勤めないか」の3つの判断軸によって感覚的に整理され、自分のカラーボキャブラリーの範疇であれば「いい色・好きな色」と判断されます。

蓄積されたカラーボキャブラリーの中から多くの構造物が景観として創り出され、それがさらに個人個人のカラーボキャブラリーを生むこととなります。個人においても社会においても、これらはお互いに影響されながらお互いを生み出し、長い年月の中で繰り返されていきます。この繰り返しの過程を経て洗練されることで、景観がどんどんよくなっていくか、あるいは悪くなるかが、その人・土地・国の文化のありようになります。毎日見ている景観は、そこに住む人の感性を育てることにそのままつながります。

[→p.3]

[→p.5]

[→図9, 図10]

[→p.4]